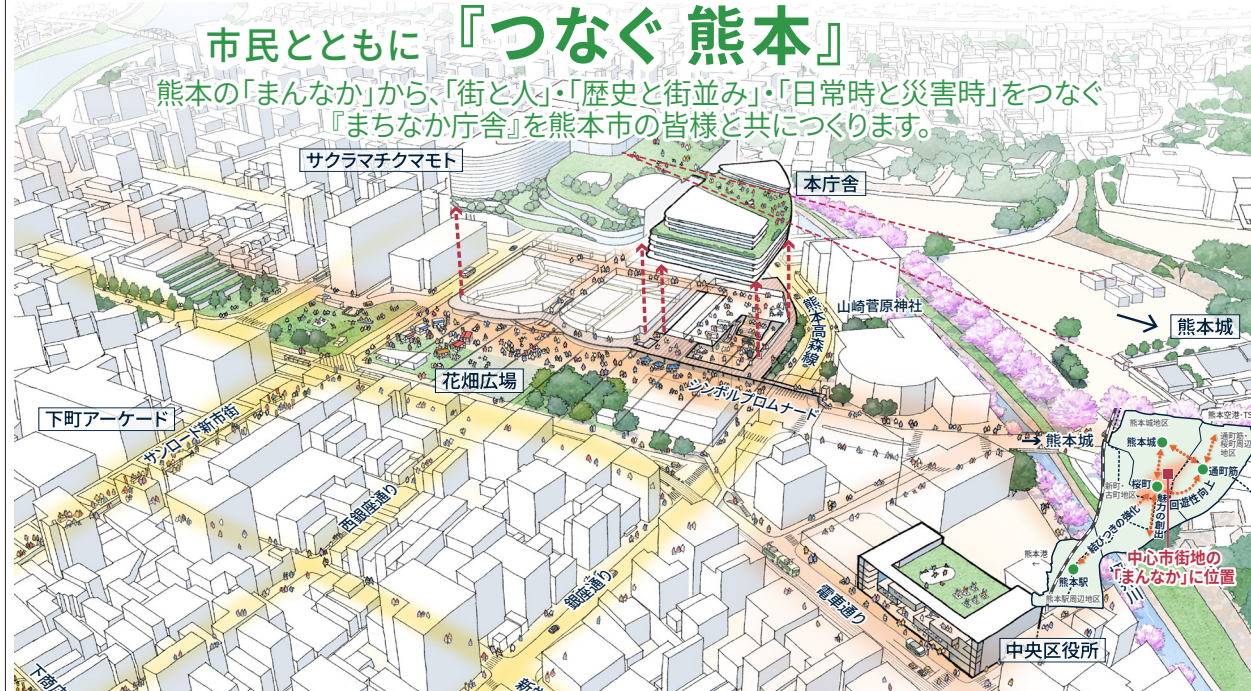


提案書概要版 (契約候補者)

【テーマ1】 熊本市が目指すべき新庁舎の在り方と実現するための手法等

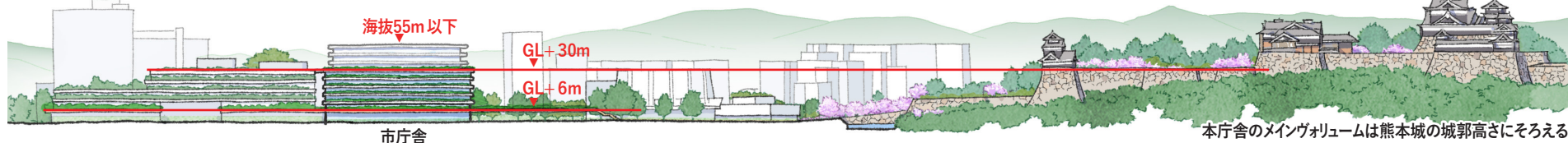
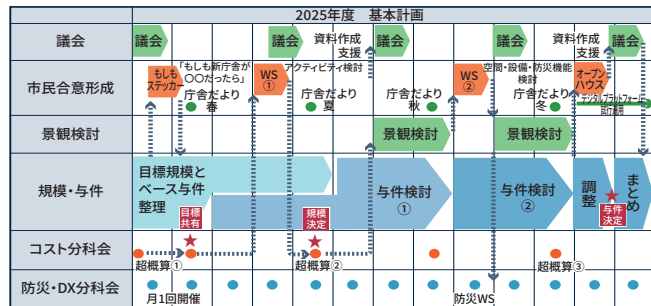


基本計画から実施設計までを通して、着実で無駄のない与件整理と業務推進を行います。

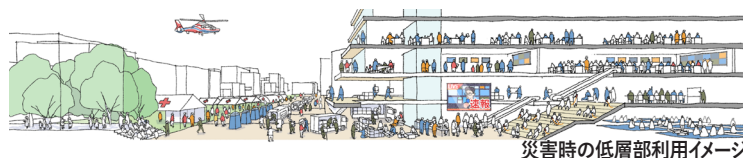
基本計画で重視する5つの観点

- POINT 1 市民・庁内・議会との合意形成**
市民WSで収集した意見を起点に、専門領域毎の分科会で議論し、市民と議会に発信・報告。丁寧な合意形成を重視。
- POINT 2 熊本らしい景観づくりと庁舎のイメージづくり**
本庁舎と区役所に共通する熊本らしいデザインを重視。
- POINT 3 災害の教訓を活かした防災減災対応**
過去の災害を踏まえた防災対策指針を実践する災害対策施設。
- POINT 4 DXを踏まえた的確な規模・与件整理**
DXを検討する別業務と連携し、適正な執務面積を与件化。
- POINT 5 市況を踏まえた建設コスト目標の共有**
最新の庁舎発注実績と弊社の市況分析に基づく、目標予算の共有。

市民合意形成と超概算を軸とした与件整理の手法とフロー



【テーマ2】あらゆる災害に対応できる庁舎



1. 「地域防災計画」「業務継続計画」「受援計画」「エリア防災計画」を確実に実践する熊本式ノンダウン庁舎を検討します

- 予防から復旧・復興までのフェーズごとに必要な災害対策を整理し、整備方針を決定します。
- 災害リスクに備えた、安全で費用対効果の高い予防対策を講じます。
- 確実に災害対策拠点機能を維持するノンダウン庁舎を検討します。
- 様々な受援を受け入れ、エリアの防災力を高めるパブリックスペースを計画します。

2. 独立性と拡張性のある災害対策拠点と様々な支援活動ができるパブリックスペース『市役所ひろば』を検討します

- 防災拠点の司令塔となる災害対策本部の高いセキュリティの維持を検討します。
- 日常の設えが災害対策拠点に早変わりするフェイズフリー庁舎を目指します。
- 災害規模、フェイズに対応する、可変性のある災害対策本部を計画します。
- 様々な災害支援スペースとなる『市役所ひろば』を検討します。
- 内部組織と外部支援組織の連携を重視した階構成とゾーニングを行います。
- 防災拠点の与件を確実に整理する『防災分科会』を立ち上げ、熊本市ならではの防災拠点のあり方』の方針を整理します。

目指すべき『まちなか庁舎』の6つのコンセプト

1 市民が集い、まちのシンボルとなる庁舎

- ・市民参画により、市民に愛される『まちなか庁舎』
- ・「まちの大広間」である花畑広場と連携した『市役所ひろば』
- ・「賃景」の取り組みを継承する高さを抑えた緑の景観づくり
- ・地場産木材などを活用する熊本らしい庁舎

2 中心市街地の賑わいや回遊を強化する『まちなか庁舎』

- ・まちに開かれ多様な活動・賑わいを誘発する『市役所ひろば』
- ・市街地の回遊性向上する『市役所ひろば』と『区役所テラス』
- ・本庁舎と区役所での役割分担と相互連携

3 まちと市民を災害から守る熊本式ノンダウン庁舎

- ・日常時と災害時でフレキシブルでフェーズフリーな安心安全の設え
- ・免震構造を念頭に置いた、確かな耐震性能
- ・重要諸室・機器を上階に設置する災害に強い断面構成
- ・桜町・花畑地区との連携によりエリア全体の防災力を向上

4 誰もが使いやすい、市民・職員のための庁舎

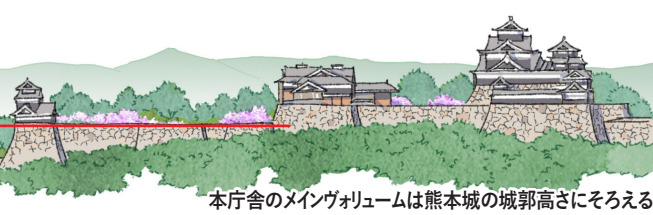
- ・明快なゾーニングで分かりやすい窓口と働きやすい執務室
- ・公共交通とのアクセスビリティを高めたウォークアブルの拠点
- ・周辺交通への影響を抑える駐車場計画
- ・すべての人をやさしく受け入れるインクルーシブデザイン庁舎

5 ニーズに応じて変化するフレキシブル DX 庁舎

- ・行政ニーズと働き方の変化に対応するワンプレートの大きな庁舎
- ・段階的なDX化を踏まえた区民窓口のソフトとハードの最適化
- ・将来の機能・規模の変化を受け止める自由度の高いプラン

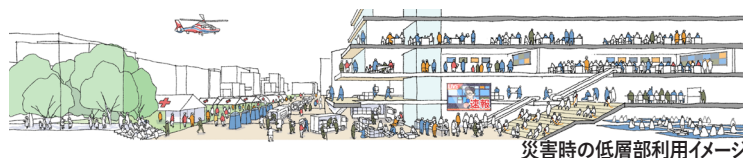
6 経済性と環境対策を両立する持続可能な庁舎

- ・適切な規模・環境性能でLCCを抑えるコンパクトなCN庁舎
- ・維持保全・修繕を最適化するDXと長寿命建築でLCCを最小化
- ・環境技術で執務効率・快適性を向上する庁舎



本庁舎のメインヴォリュームは熊本城の城郭高さにそろえる

【テーマ2】あらゆる災害に対応できる庁舎



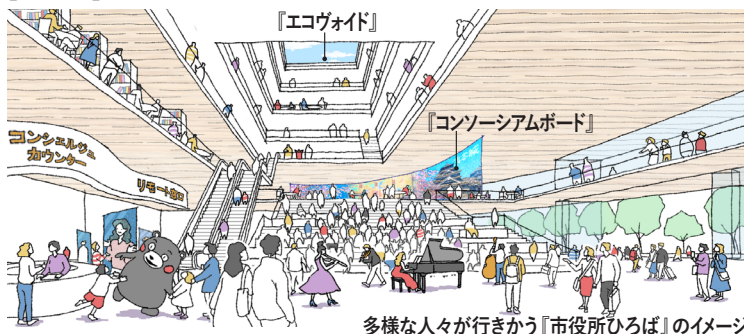
1. 「地域防災計画」「業務継続計画」「受援計画」「エリア防災計画」を確実に実践する熊本式ノンダウン庁舎を検討します

- 予防から復旧・復興までのフェーズごとに必要な災害対策を整理し、整備方針を決定します。
- 災害リスクに備えた、安全で費用対効果の高い予防対策を講じます。
- 確実に災害対策拠点機能を維持するノンダウン庁舎を検討します。
- 様々な受援を受け入れ、エリアの防災力を高めるパブリックスペースを計画します。

2. 独立性と拡張性のある災害対策拠点と様々な支援活動ができるパブリックスペース『市役所ひろば』を検討します

- 防災拠点の司令塔となる災害対策本部の高いセキュリティの維持を検討します。
- 日常の設えが災害対策拠点に早変わりするフェイズフリー庁舎を目指します。
- 災害規模、フェイズに対応する、可変性のある災害対策本部を計画します。
- 様々な災害支援スペースとなる『市役所ひろば』を検討します。
- 内部組織と外部支援組織の連携を重視した階構成とゾーニングを行います。
- 防災拠点の与件を確実に整理する『防災分科会』を立ち上げ、熊本市ならではの防災拠点のあり方』の方針を整理します。

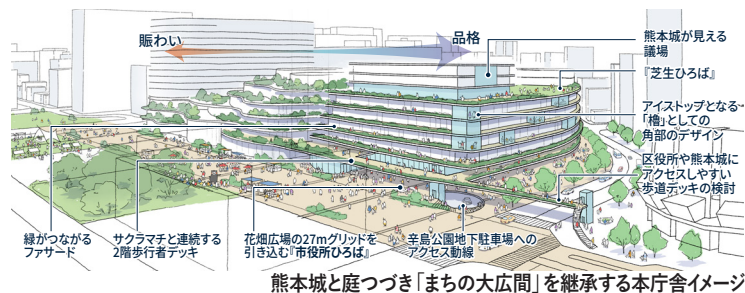
【テーマ3】市民が利用しやすく、質の高い行政サービスが提供できる庁舎



1. 多様な来庁者の新たな交流と体験を生み出し、職員が誇りをもって働ける市庁舎・区役所を目指します

- 市庁舎は、市民のための『市役所ひろば』と執務・議会ゾーン、区役所は、窓口を持つ執務ゾーンとして、役割を明確にします。
- 時代の変化と共に多様化する行政サービスや職員の働き方改革、業務効率化を背景に、窓口や執務スペースのみならず庁舎のあり方が大きく変化していくと考えられます。その実現のためにDXを有効に活用できる市庁舎・区役所のあり方を検討します。
- 市民・職員だけでなく多様な人々が出会い、新たな発見を体験する場をつくり、地域産業の活性化や新たな活動を育む、市民・職員の誇りとなる庁舎をつくります。またそれにより、将来の熊本市を担う人材確保につながります。

【テーマ4】まちの賑わいに貢献し、まちづくりの核となる庁舎



1. 市民に開かれたまちづくりの拠点・まちと連続したアクティビティを誘発する『まちなか庁舎』を目指します

- 市庁舎と区役所それぞれの立地特性を活かし、市民や来街者等に対して、各々の役割を備えたまちづくりの拠点となるよう計画します。
- 市庁舎と区役所を一体的に検討・デザインすることで、様々なアクティビティを誘発し、人々が思い思いに過ごすことのできる、活気あふれる庁舎を目指します。

2. 熊本城と庭つづき「まちの大広間」を継承し、まちの歴史・賑わい・緑を感じる『まちなか庁舎』を検討します

- 熊本城への眺望を大切にしたい庁舎を目指します。
- まちなみとの調和と、賑わいと品格を具現化歴史を継承し未来につなぐ熊本らしいデザインを追求します。
- 熊本城への複数の視点場を決め、3DやVRによりボリュームを検証します。

『まちなか庁舎』のコンセプトを実現するための基本計画の考え方

本庁舎の考え方

- 1 熊本城ホールから熊本城への眺望確保とサクラマチクマモトの屋上庭園との一体化検討
- 6 熊本城がよく見える、階高を抑制した建物ボリューム
- 熊本城を望む『芝生広場』と『展望ギャラリー』

3 大きな1フロアの執務スペース

- 4 多様な働き方やレイアウト変更が容易な執務スペース
- 5 奥行き深い深い執務スペースに自然光と風を導く『エコヴォイド』
- 職員のコミュニケーションを活性化し、随所に設けた階段

3 災害対策機能を3階に集約

- ・災害対策の本部や災害対策スペースを集約化
- ・直下階の『市役所ひろば』（災害支援スペース）との円滑な連携

2 バスターミナルとつながる

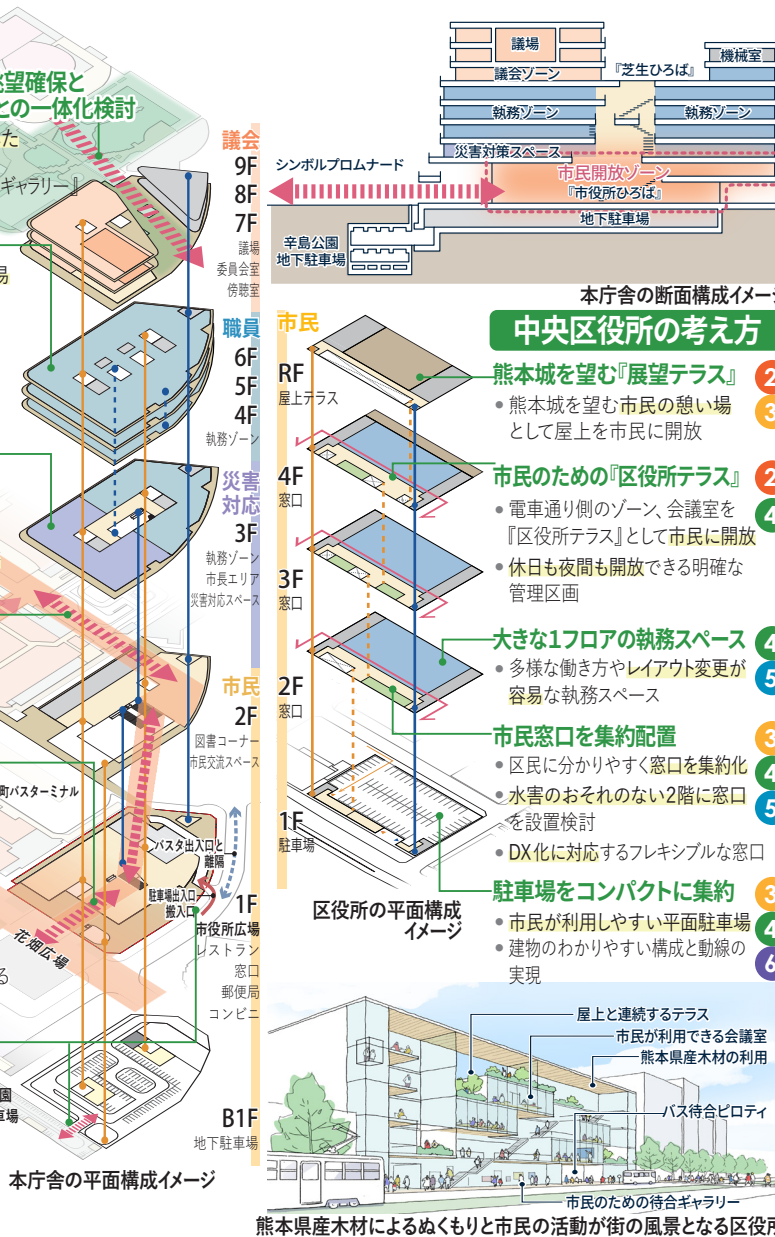
- 3 回遊動線
- 4 サクラマチバスターミナルコンコースと『市役所ひろば』、2階を接続し市民のアクセス、利便性を向上

2 花畑広場と一体で利用できる

- 3 『市役所ひろば』
- 4 花畑広場にない屋根のある市民活動広場
- 5 災害時には一時避難、支援物資の受入、罹災証明書発行のスペース
- 図書や飲食、コンビニなどの利便施設が市民活動をサポート
- 地域企業や商店街が情報発信できる『コンソーシアムスペース』

4 交通への影響を最小限にする駐車場計画

- ・交通量調査に基づいた駐車場の出入口の位置検討
- ・辛島公園地下駐車場への接続を検討

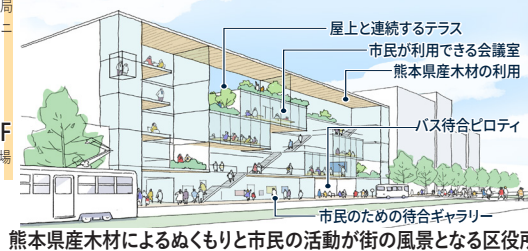


本庁舎の平面構成イメージ

本庁舎の断面構成イメージ

中央区役所の考え方

- 2 熊本城を望む『展望テラス』
- 3 市民の憩い場として屋上を市民に開放
- 2 市民のための『区役所テラス』
- 4 電車通り側のゾーン、会議室を『区役所テラス』として市民に開放
- 3 休日も夜間も開放できる明確な管理区画
- 4 大きな1フロアの執務スペース
- 5 多様な働き方やレイアウト変更が容易な執務スペース
- 3 市民窓口を集約配置
- 4 区民に分かりやすく窓口を集約化
- 5 水害のおそれのない2階に窓口を設置検討
- 3 駐車場をコンパクトに集約
- 4 市民が利用しやすい平面駐車場
- 6 建物のわかりやすい構成と動線の実現



熊本県産木材によるぬくもりと市民の活動が街の風景となる区役所

【テーマ3】市民が利用しやすく、質の高い行政サービスが提供できる庁舎

1. 新庁舎整備を契機に、まちなかでの公共交通利用促進・交通円滑化等を先導します

過度な台数整備を避ける駐車場計画を検討します

- 適正な将来駐車台数を検証・設定します。
- 周辺既存駐車場の活用・連携を検討します。

公共交通の円滑化・利便性を最優先にした車両動線を検討します

- 公共交通軸への自動車負荷の低減方法を検討します。
- 経験を活かした効率的・実効的な検討を進めます。

まちなかの魅力や回遊性向上に資する交通施策を検討します

- ウォークアブル施策に貢献する熊本高森線改良も視野に入れた交通計画検討します。
- 公共交通利用推進方策を新庁舎周辺で先導実施し、啓発につなげます。

【テーマ5】新庁舎整備に向けたコストマネジメントの考え方

1. 建築・防災・環境のバランスをはかる、最適なコストマネジメントを実践します

物価上昇下におけるコスト抑制を実現する5つのポイント	
Point1	コンパクト 庁舎建築として必要最小限の建築・構造・設備計画
Point2	DX DX/ICT 活用による必要十分かつ適正面積の庁舎
Point3	防災 安全性が高く、費用対効果が高い構造計画
Point4	環境 ZEBと執務効率・快適性向上の両立
Point5	LCC ランニングコストの最小化と最適な維持管理

- 基本計画で3段階の超概算を行い、コストと運動しながら費用対効果の高い設計と件を選択します。基本・実施設計段階でコスト比較ができるようにします。

提案書概要版
(契約候補者以外の提案者※)

※順不同（４者分）

未来の価値を生み出す場づくりとなる「まちと共にある」庁舎

これからの庁舎は、未来の価値を生み出す場としての役割の視点で捉え直すことが重要であると考えています。

「くまもと」というまちの未来を考え、みなさまと対話することで、その価値を発見し、そして、それを共有できる環境の整備こそが、私たちが目指す「まちと共にある」あたらしい庁舎の姿です。

未来の価値を生み出す“みらいのひろば”となる新庁舎

- ・DX時代を迎え、市役所の役割が行政サービスから相談・協働へとそのカタチが大きく変わろうとしています。市民一人ひとりが、まちに関心を寄せ、まちづくりという行政の大きな課題に大きく関わりを持てるような、受け皿となることが「まちと共にある庁舎」に求められていると考えています。
- ・新庁舎はそんな市民の集まる「みらいのひろば」となる庁舎とし、「みらいのひろば」は、まちの未来を生み出す市民活動の場と位置付けます。みんなの想いがまちの種となり、いずれ芽を出し、収穫するという、市民にとっての「まちづくりの畑」のような場と考えました。
- ・「出会いと発見」⇔「魅力の再発見」⇔「改善と提案」という好循環が生まれる場こそが、真に求められているあたらしい庁舎だと考え、ここに提案します。

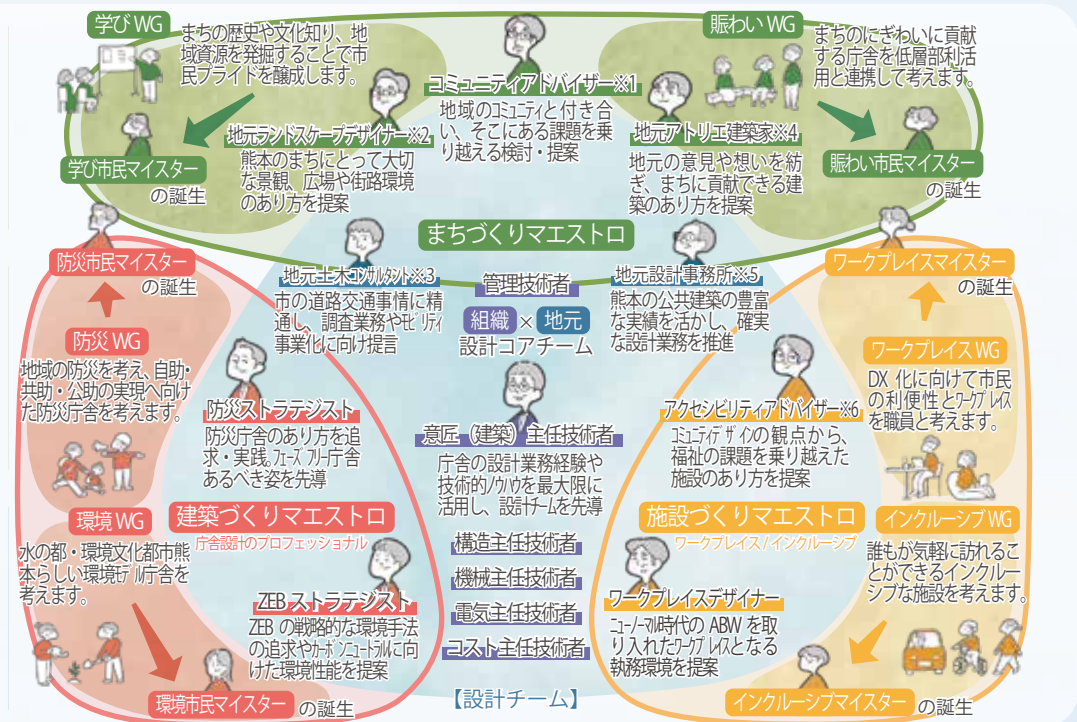


未来の価値を生み出す場をつくる、 「共創」のフォーメーションと 設計プロセス

本プロジェクトには、様々な人たちが参加・協力する共創社会にふさわしい、新しい設計体制や設計手法が必要と考えています。

それはひとりの建築家の個性や大手組織事務所の技術的な知見によるものでもありません。

「まちと共にある」庁舎を実現するために、まちへの想いや心象風景、地域の感性をカタチにする、「共創」のフォーメーションと設計プロセスを提案します。



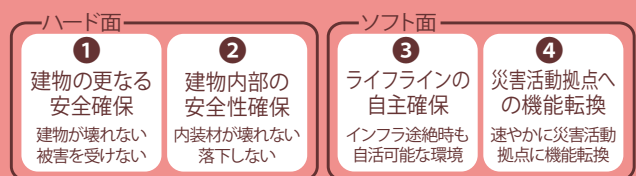
「いつも」と「もしも」に活躍する フェーズフリーな庁舎

地震や水害に対する確実な安全性確保のもと、災害時の機能維持と共に、災害時を想定した機能転換や機能拡張が可能な計画とすることが大変重要なポイントです。

この花畑広場にひらかれた市民の日常の居場所となるこの市役所は、災害後は一時的な災害対応に留まらず、長期にわたる復旧活動を継続する必要があります。

災害活動拠点庁舎に必要な4つのBCP要素

建物のハード面では熊本地域の特性を踏まえた安全性を確保し、ソフト面ではインフラ確保のもと、災害活動拠点へと速やかに機能転換や機能拡張が対応可能な計画とします。



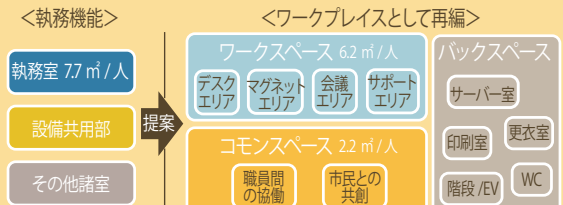
時代の変化と共に歩めるフラットな ワークプレイスとなる庁舎

変化・更新が続けられる持続可能な、すべての場所がフラットなワークプレイスとなる庁舎を提案します。

DX化を見据えた業務のスマート化に対応できる柔軟性・拡張性・冗長性を兼ね備えると共に、職員や市民との協働・交流を育む協働交流型のワークプレイスです。

協働交流型のワークプレイス実現のために

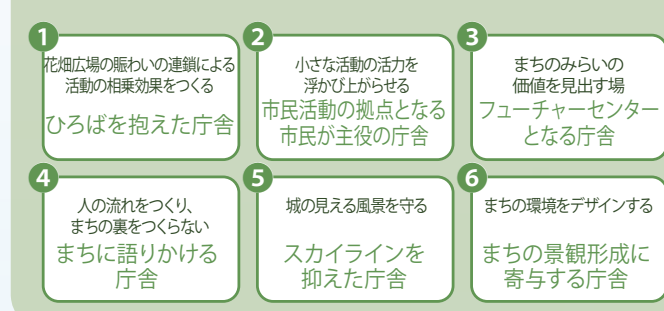
要綱の執務機能の役割を分析し、ワークプレイスへと分類し再編します。多様な働き方や将来の変容に答えと共に、協働・交流と知的生産性を高めたワークプレイスを実現します。



熊本市の未来へつなぐ、市民が主役となりまちの賑わいの風景に参加する「まちと共にある」庁舎

まちの賑わい拠点である花畑広場とつながって、市民が日常的に集まる姿がまちの魅力的な風景として浮かびあがる姿を目指します。そして水と緑のまち熊本に対する市民の心象的な景観を大切にしながら、人の流れや街路の景観形成に寄与すると共に、まちの賑わいの風景として参加できる「まちと共にある」庁舎のあり方を提案します。

まちと共にある庁舎のために必要なコンセプト

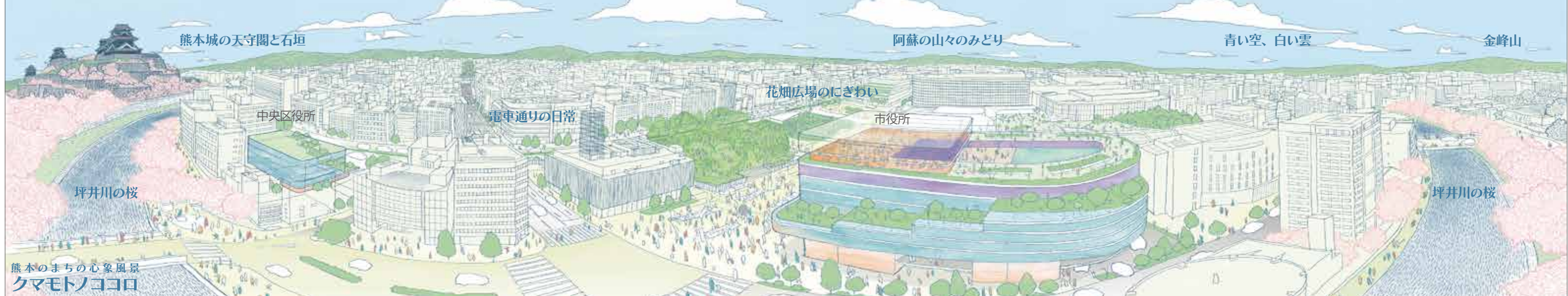
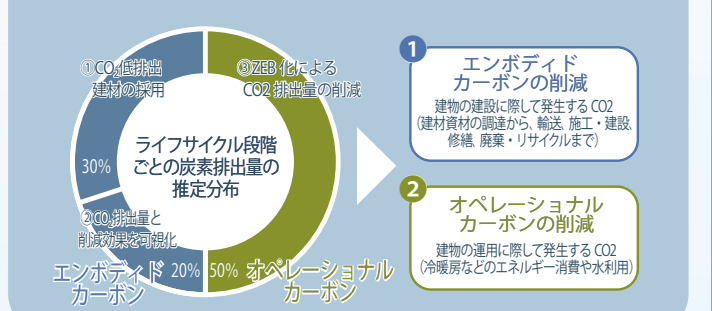


これからの時代を牽引する環境共生型の庁舎 実現に向けたコストマネジメント手法

いま私たちに求められているのは、建築ハード面の削減ではなく「建築手法の適正化」と考えています。

コスト抑制の概念を見直し、カーボンニュートラルの視点からコストマネジメントを行います。建築の経済合理性や機能性のもと、くまもとの自然や建築空間を活かし「建築と技術が融合」した、ライフサイクルコストを最小化する環境共生型庁舎を実現します。

カーボンニュートラルな視点からのコストマネジメント



新庁舎の在り方「くまもと 2050 のマチづくり」(賑わい・防災・エコロジー)の起爆剤となり、「ユニバーサルな市民サービス」を実現する新庁舎

マスターコンセプト(基本的戦略):「城下町都市・山水都市 くまもと」の基盤を生かして「ヒトが繋がり、マチが繋がる」起爆剤となる新庁舎

基本的な考え方: マチづくりと新庁舎「規模から質への転換」

① マチの課題と新庁舎: 熊本市の都心部は中長期的課題として①人口減少とそれに伴う活力低下や土地利用の空洞化、②都市機能の更新等の課題を抱えており、更に③気候変動や④頻発する災害への対応も求められています。この様な課題解決を先導する場として新庁舎を位置づけます。

② マチの方向性と新庁舎: 私たちは人口減時代の都市機能更新に向けて、将来のマチを「規模から質」への転換を図る「くまもと 2050」として構想します。2050 年の職・住・遊のデジタル化が一層進んだ社会のマチづくりではリアルな価値が再評価されると考えられ、その価値とはヒトとの出会いやヒトを惹きつける活動、社会的弱者の活躍も含めて「知縁的活動」の舞台となるマチの空間や自然との繋がりで。私たちは縮小の時代に賑わいを生み出す価値の創造と防災性・エコロジーが高まるマチづくりを推進しながら、マチを構成する建築のモデルとしての新庁舎を提案します。



図2_賑わいマチづくりと自然・歴史景観との呼応

コンセプト1.「山水都市くまもと」ならではの新庁舎

① マチの回遊性向上の起点となる: 立地のポテンシャルを活かし、回遊性向上の起点となる新庁舎を目指します。そのために人々の動きを受け止め、活動が交差する新庁舎とします。

② 歴史性と自然との関係を未来へ繋ぐ: 藩政期から現代に至る町割りや街並みと呼応し、「熊本スピリッツ (簡易・善良・素朴)」(小泉八雲)を体現する庁舎づくりを目指します。また、山水都市の特性を踏まえて都市生活と自然の関係を再考し、エコロジカルなマチづくりをリードする新庁舎とします。

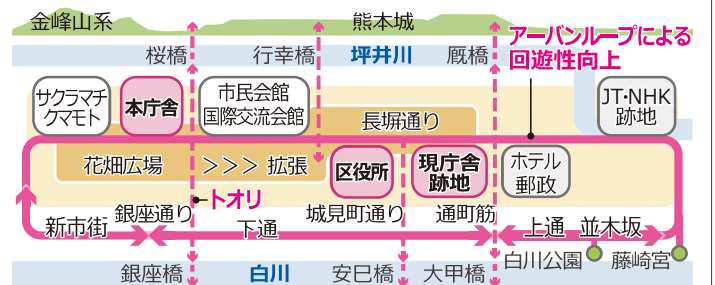


図4_賑わい・回遊性向上と自然・歴史が重層するマチづくり

新たな都市基盤「余白・アーバンループ・トオリ」と新庁舎

様々な繋がりを生むヒトの出会いや活動、更には防災やエコロジーのためには機能を限定しない「余白」となる空間が重要と考えます。その様な新庁舎やマチの「余白」が連鎖することで新たにマチが繋がり、ヒトが繋がり、自助・共助・公助の基盤が形成されると考えます。私たちは、この「余白」を繋ぎ合わせ、現在の賑わいの基盤「2核3モール」をループ状に拡張する仕組み「アーバンループ×トオリ」形成の起爆剤となる新庁舎を提案します。

①「余白」	アーバンループとトオリに沿って、新たなマチづくりガイドライン(案)により公開空地設置を誘導。今後増えると思われる空地は広場・緑地等に再編し、楽しく時間を過ごすことができる滞在型のマチづくりを提案します。
②「アーバンループ」	本庁舎、中央区役所、現庁舎敷地の3つの計画が日本郵政やホテルへ、坪井川を挟んだJT-NHK跡地等へと波及し、3モール〜花畑広場へとループ状に繋がるウォーカブルな都市基盤の形成を提案します。
③「トオリ」	アーバンループを横断する既存の「通り」を活かして、選択的にマチ歩きができる街区レベルの回避ループの形成を提案します。

表1_余白・アーバンループ・トオリ

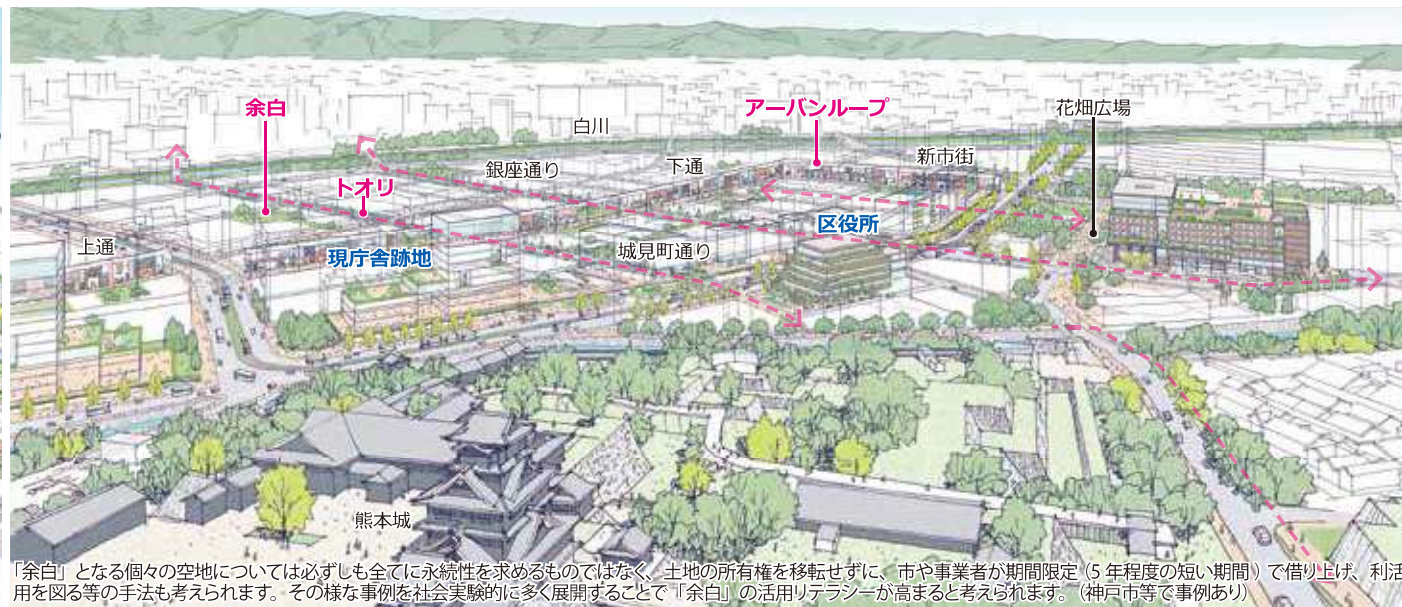


図3_マチの「余白」を繋ぐ「アーバンループ×トオリ」—その起点となる新庁舎

コンセプト2.「防災マチづくり」の拠点となる新庁舎

① 災害の教訓を活かす・継承する: 熊本の大規模災害のデータや教訓等を入念にリサーチし、実効性の高い計画を行います。また、アーカイブ展示スペース等により熊本地震や白川水害を伝える地域拠点とします。

② 日常の延長にある防災マチづくり: 災害時に「アーバンループ」と「トオリ」は避難路・緊急車両のアクセス路となり、「余白」は一時避難受入れ等の共助の場へと役割を変えます。新庁舎は、余白を内包する計画とする事で防災マチづくりの拠点とします。

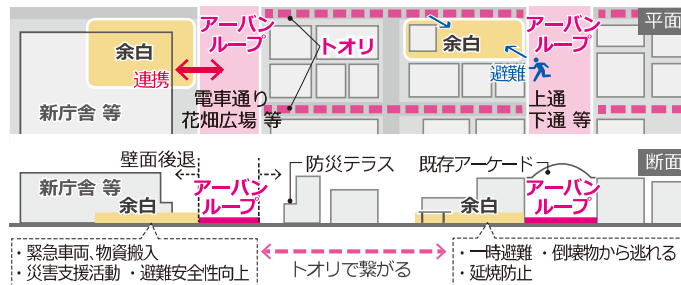


図5_地域防災に資するアーバンループ・トオリ・余白の考え方

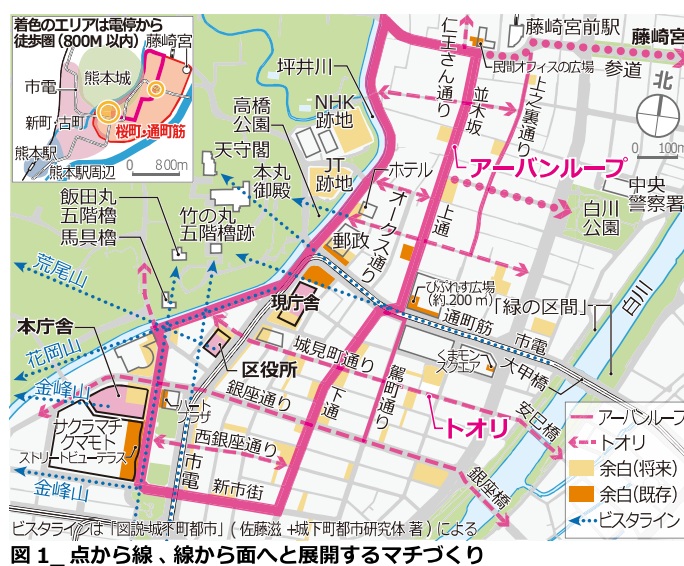


図1_点から線、線から面へと展開するマチづくり

コンセプト3.ユニバーサル市民サービスを提供する新庁舎

① いつでもどこでも行政サービス: COVID-19は「庁舎に行けない＝行政サービスを受けられない」ことを顕在化させました。新庁舎では、諸手続きや相談のオンラインサービスに対応する施設計画と、対面によるサービスのための空間づくり双方の充実を図ります。

② 公・民・学の共創によるユニバーサル市民サービス: 新庁舎を市民主体でマチづくりを行う共創の場と捉えます。公・民・学の共創を喚起する「余白」となる空間を充実させ、従来の行政サービスをこえた市民サービスを提供できる新庁舎とします。

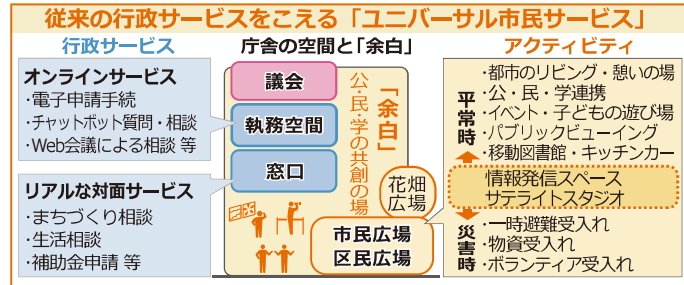


図6_庁舎の空間と行政サービスをこえる市民サービスの考え方

マチとの繋がりを生む交流の拠点

① オープンスペースの連鎖を生む2つの広場: 本庁舎の敷地は熊本城から花畑広場へ、区役所の敷地は城見町通り・電車通りから長堀通りへと、オープンスペースの繋がりを生み出す力を秘めています。その力を引き出すため、両者共に角地に広場をつくり、行政・市民・マチの交流の起点とし、その連鎖を引き出します。

② 市民に求められる「マチの機能」を充足する: 中心市街地のマチの機能を分析し、庁舎に付帯する機能や市民スペース、広場の在り方を検討します。市民が潜在的に必要な機能に対話のうえ定めます。

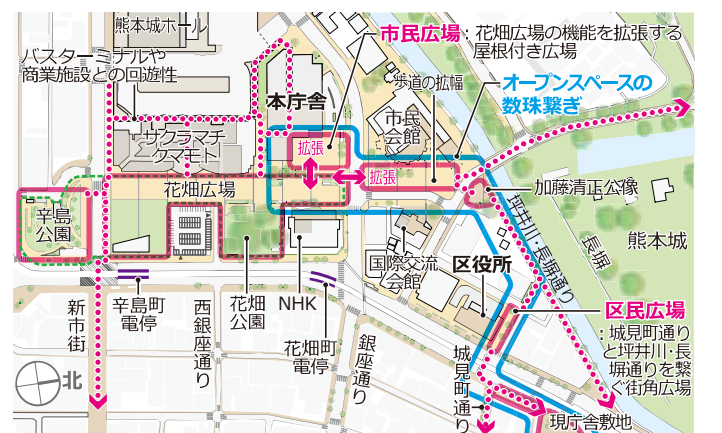


図7_回遊性を生み出すオープンスペースの連鎖

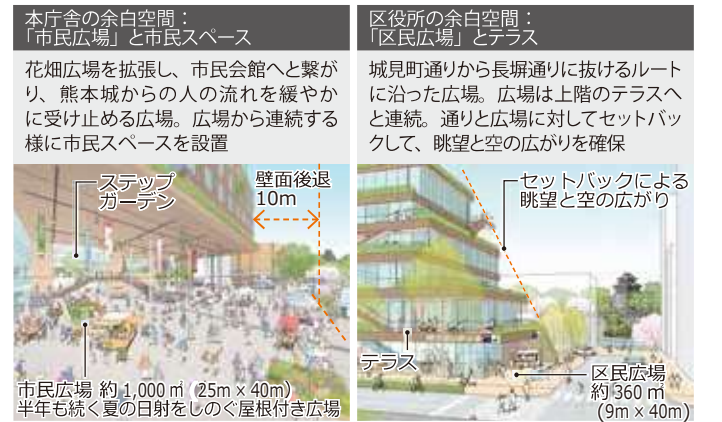


図8_市民広場のイメージ

図9_区民広場のイメージ

市民に開かれた合意形成プロセス

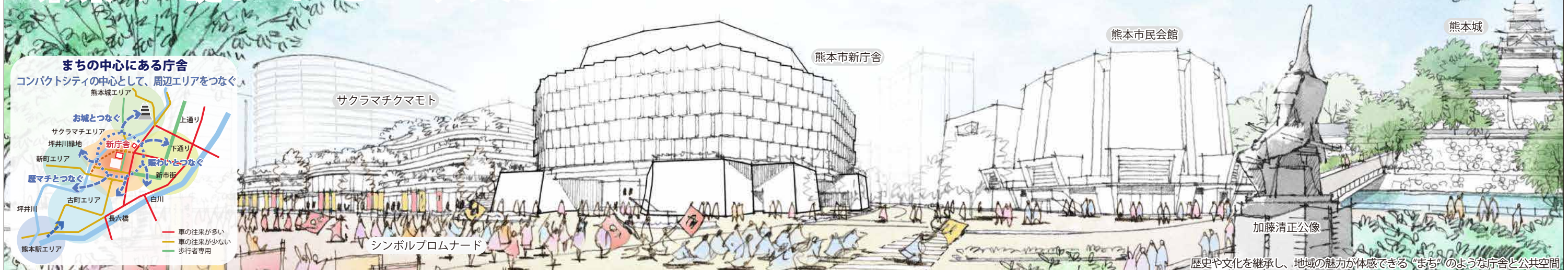
① 「理解度を深める」市民ワークショップ(WS)の開催: WSは現庁舎が抱える課題への理解を深めてもらうことから始め、新庁舎の在り方に対する共通認識の形成をゴールとします。

WS	1回目(WS1)	2回目(WS2)
テーマ	・現庁舎の課題整理 ・新庁舎での解決策に関する検討	・WS1の意見に対する考え方の整理 ・WS1で関心が高いと思われる項目(市民スペース・窓口・利便施設等)に関する検討
ワーク	・現庁舎見学会、ダイアグラム1の提示 ・現庁舎の課題と解決策のプレスト	・WS1を踏まえたダイアグラム2の提示、事例紹介 ・テーマ別にグループ分けしてプレスト

表2_基本計画におけるWSの内容(案)

② 「市民参加の幅」を広げる: 基本計画では、WSに参加できなかった方を対象にWSを補完する意見交換会を行います。様々な観点のニーズを拾い上げるために、WSと異なる属性別のグループ(障がい者、子育て世代、災害ボランティア、地域団体等)を対象とし、各コンセプトについて意見交換を行います。

未来の“礎(石垣)”をつくりだす — 歴史と今が共存する新しい熊本市庁舎 —



熊本ならではの庁舎の姿とは、**歴史や文化を継承**しつつ、市民交流の場とデジタル情報が融合する“今までにない新しい場”に人々が集まり、**地域の魅力が体感**できることだと考えます。

城下町である熊本市街は、領域性をもちながらコンパクトで賑わいあるまちを形成しています。私たちは、そのまちの中心に、市民が日常的に訪れる**広場＝『フォーラム』**を設け、ここで展開される主体的な活動が熊本の更なる活力を生み出していく“**まち**”となる**庁舎**を提案します。

『フォーラム』には、防災・まちづくり・観光・産業・市民協働といった**テーマ別の“活動の場”**とともに、**市民活動が自律的に継続する“仕組み”**を、熊本市民と共に作り出します。

また、熊本城(石垣)から桜町・花畑地区に至る一帯の『**多様性と全体性**』を**調和させる庁舎**は、市民や観光客、訪日外国人に熊本の魅力を伝える象徴となり、庁舎が都市の中で熊本城と共に確固たる存在感を放つ場となります。

このような**庁舎づくりをまちづくりの原点**と位置づけ、**熊本の未来の礎**として災害に強く、地域文化を育みながら新しい市民価値と活力を生み出す拠点を計画します。

【“熊本ならではの庁舎づくり”で重視する方針】

1 防災拠点の庁舎

堅牢な外郭

熊本城のアイデンティティである石垣(外郭)が活動の場を守り支える



2 まちに開かれた庁舎

熊本の魅力が集まる『フォーラム』

人々が集まり、議論し、発信して、新しい文化を生み出す拠点



3 知的生産性を高める庁舎

自発的な活動を生み出す『ワークスペース』

時代の変化に対応した『人・情報・活動』が融合するフレキシブルなワークスペース



“熊本ならではの庁舎づくり”で重視する方針

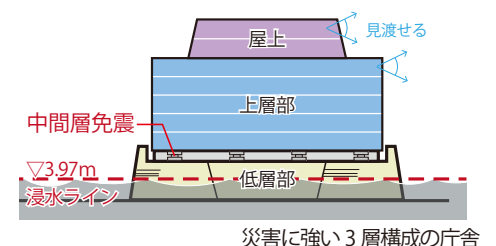
【市民が行き交い、集い、情報が生まれる新しい庁舎】



【“熊本ならではの庁舎づくり”を実現するコンセプト】

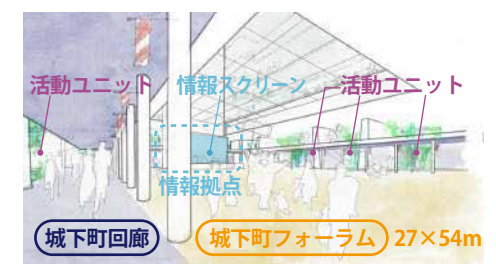
1. 市民交流と守りの“礎(石垣)”となる庁舎

- **都市の歴史と文化の継承**…伝統と革新の象徴である熊本城の思想を取り入れ、伝統的な強さと現代的な柔軟性が融合した庁舎をつくりだす。「石垣」に囲まれ開かれた低層部は、人々が集い、市民活動や情報を育む場とします。
- **防災と再生の象徴**…「石垣」の構成による地震や水害等への安全性、開かれた市民のシェルターとなるフェーズフリーな交流の場が、地域の安心感を高めます。



2. まちを育み、活力を生み出し、“まち”をつなぐ庁舎

- **活動と情報を集約**…プロムナードと連続する「城下町フォーラム」は、あらゆる市民活動と情報が集約され、一望することができる“まち”となる場です。
- **新しい文化を発信**…活動を支援する仕組みづくり(リビングラボ※の立上げ・運用)を行い、活動の持続性を高めます。この場で育まれる新しい文化がまちに発信され、庁舎がまちに浸透していく、“まちのための庁舎”を実現します。



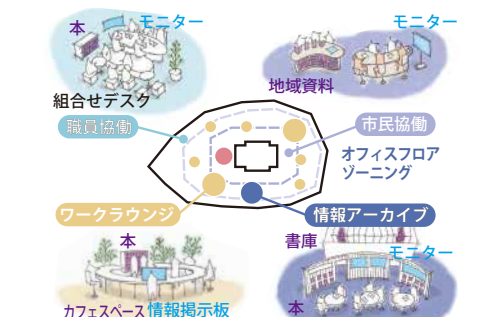
熊本のすべての魅力が集まる城下町フォーラム

※リビングラボ：市民、企業、行政が協働して社会課題の解決や新しい価値の創造を行う方法

3. 『人・情報・環境』が融合し、自発的な活動を生み出す庁舎

- **オープンで柔軟なワークスペース**…フレキシブルなオープンスペースに「活動と情報の拠点」が点在する、柔軟な ABW※を実現できるワークスペースとします。
- **ウェルネスオフィスの実現**…「人・情報・環境」が連携するワークスペースにより、コミュニケーションを促し、知的生産性を高めます。

※ABW：業務内容に応じて働く場所を選択する働き方



人と情報と活動が出会うワークスペースイメージ